



みえを歩こう
 鑄物の街・桑名めぐり

桑名市 市街地界限

江戸時代を通じて、旧東海道の宿場町、桑名藩の城下町として賑わった桑名には、別の一面があります。初代藩主・本多忠勝が奨励したことには始まる「鑄物の街」としての顔です。鑄物産業の発展は明治時代以降も続き、地場産業としての確固たる地位を築きあげました。

現在、「七里の渡し跡」「六華苑」「九華公園」など、散策場所に事欠かない桑名市市街地ですが、今回は、少し視点を変えて「鑄物」めぐりをします。新たな桑名の魅力を発見することでしょう。

取材・文：中村真由美



住吉入り江に架かる玉重橋

玉重橋の親柱と高欄

「最初に、住吉入り江に向かいます。入り江に架かる玉重橋は、鑄物の街ならではの珍しい橋ですよ」との中根さんの案内で、散策の起点となるJR・近鉄「桑名」駅から、東へと進みます。15分程度歩くと、黒いランタンのような形の柱が見えてきました。これが玉



住吉入り江

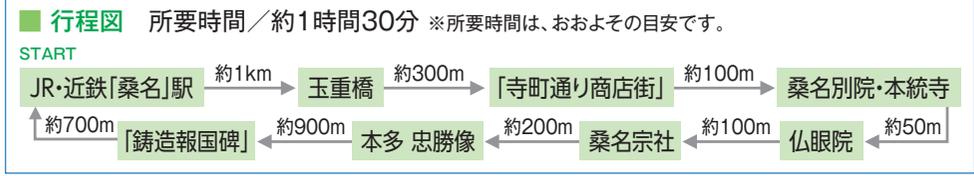
カラフルなマンホール蓋

玉重橋を後にして、入り江に沿って歩きます。歩道や護岸には赤レンガが張られ、隣接する「諸戸氏庭園」などの景観と見事に調和しています。

重橋の親柱(欄干の端など)にある太い柱で、ほかにも高欄や高欄支柱が鑄物だと教わります。鑄物とは、溶かした金属を鑄型に流し込んで固める鑄造方法と、その製品(鑄造製品)の総称です。使用する金属は、鉄青銅・鉛・アンチモン・アルミニウムなど。桑名では、古くから鉄を使った鉄鑄物が多く、親柱などの黒色は、鉄鑄物の特色なのです。



今回の案内人は「桑名歴史案内人の会」前会長の中根 静也(しずや)さん。豊富な知識に基づく軽妙な話術は、衰え知らずです。



「寺町通り商店街」



マンホール蓋

心地よい散歩を楽しんでいると、目の前に「寺町通り商店街」のアーケードが現れました。3と8の付く日に開催される朝市「三八市」や、毎月第3日曜日に開催の「十楽市」など、買い物客で賑わう商店街は、風雨を気にすることなく、鑄物製のマンホール蓋を見学することが可能なのです。足元に注目していると「桑名の千羽鶴」「七里の渡し」などの



親鸞聖人銅像

デザインの蓋を発見できました。

「次は少し時代を逆上った鋳物を見に行きましょう」との案内で、まず向かったのは、桑名別院・本統寺です。ここでは、見上げるほど大きな親鸞聖人銅像に出迎えられました。青銅製の上人像を昭和12(1937)年に鋳造寄進したのは、桑名の鋳物師・広瀬家の子孫で、実業家の広瀬精一氏です。鋳物師とは、鋳物職人のことで、同家の歴史は、本多忠勝が、現在のいなべ市から武器製造のために招いた広瀬与左衛門に始ま

「次は少し時代を逆上った鋳物を見に行きましょう」との案内で、まず向かったのは、桑名別院・本統寺です。ここでは、見上げるほど大きな親鸞聖人銅像に出迎えられました。青銅製の上人像を昭和12(1937)年に鋳造寄進したのは、桑名の鋳物師・広瀬家の子孫で、実業家の広瀬精一氏です。鋳物師とは、鋳物職人のことで、同家の歴史は、本多忠勝が、現在のいなべ市から武器製造のために招いた広瀬与左衛門に始ま



喚鐘

るといわれます。その名声は高く、文政9(1826)年には、オランダ商館の医師であるシーボルトが、江戸に向かう途中で立ち寄って見学したと伝わります。

広瀬家ゆかりの鋳物は、すぐ近くの仏眼院にもありました。万治2(1659)年に広瀬家次が鋳造した喚鐘(説法の開始を知らせるために打つ鐘)です。一般的な喚鐘より大きく、見ごたえがありました。

なお、同院では、寛永15(1638)年に京都の鋳物師が製造した梵鐘も見逃せない鋳物の一つです。

「春日さん」の青銅鳥居

仏眼院に別れを告げて東へ進むと、すぐ左手側に、木々が生い茂る一画が現れました。ここは、桑名神社と中臣神社を祀る桑名宗社で、地域の人々には「春日さん」と呼び親しまれています。平成28(2016)年にユネスコ無形文化遺産に登録された「石取祭」で知られる同社でも、鋳物の街ならではの珍しいものに出合うことができました。柱の高さが約6.7メートルの青銅製の鳥居です。

旧東海道に面して建つ鳥居は、時の



青銅鳥居

藩主・松平定重が、辻内善右衛門に命じて制作したものです。寛文7(1667)年のことでした。辻内家は、広瀬家と同様、桑名を代表する鋳物師でした。現在でも、見るものを圧倒する鳥居は、当時の俗語に「勢州桑名に過ぎたるものは、銅の鳥居」とうたわれました。その後、大雨や天災に何度も合いましたが、その都度代々の鋳物師・辻内家によって修復され、現在に至ります。

本多 忠勝像

「鋳物発展の基礎を築いた忠勝公にも合に行きましょう」との案内で、中橋を渡ります。目の前に広がる「九華公園」を眺めながら進むと、「柿安コミュニティーパーク」内に建つ銅像が姿を現しました。どっしりと座った姿は、徳川四天王と称された猛将ぶりを彷彿させています。作者は「中川梵鐘店」六代目 中川正知さんで、平成2(1990)年のことでした。

忠勝以降、代々の藩主に奨励された



本多 忠勝像



「鑄造報国碑」

ことで発展を遂げた鋳物の歴史は、明治時代以降も続きます。「東の川口(埼玉県川口市)・西の桑名」と呼ばれたほどでした。その後、主に日用品を製造しましたが、戦後は、工業製品や建設材料が主力となりました。また近年では、「くわな鋳物」ブランドとして新商品開発が行われ、ごはん釜・蚊やり器・文具なども登場。鋳物の可能性の幅が広がっています。

桑名で新発見をする散策は、再び、JR・近鉄「桑名」駅で終了ですが、途中

で「NTNシティホール(桑名市民会館)」に立ち寄り、「鑄造報国碑」を見るのもいいでしょう。これは、昭和17(1942)年に、当時の「三重鋳物工業組合」有志が建立したものです。大きな石碑には、これまでの功労者を顕彰すると同時に、さらなる発展を願う気持ちが込められているのでしよう。

問 桑名歴史案内人の会

TEL 0594-21-5416

「三重鋳物工業協同組合」

TEL 0594-23-1431